

第10回  
日本生殖内分泌学会学術集会



会長

塚本 泰司

札幌医科大学  
医学部  
泌尿器科学講座  
教授

昨年（2005年）11月3日文化の日に第10回の節目の本学会学術集会をお世話でき、会員の諸先生のご支援に感謝致します。

第10回学術集会のテーマとして、①精子発生にかかわる遺伝子変化、②卵巣機能と内分泌環境、③生殖機能の中核制御、など少し欲張った企画を提示させていただきました。幸い会員の皆様のご支援をいただき、十分ではなかったかもしれませんが、何とかこのテーマに近づくことができたのではないかと考えています。

さて、本学術集会では、テーマの1つにあげさせていただいた「卵巣機能と内分泌環境」に関して、Michael Skinner教授の特別講演をいただきました。“Regulation of ovarian primordial follicle assembly and development: establishing female reproductive potential”と題した講演では、卵巣機能にかかわる各種のホルモンとパラクライン成長因子と相互作用に関する最近の知見が示され、これらは女性の妊孕能のみならず更年期障害の発生などの理解にも結びつく可能性があることが報告されました。この分野のさらなる理解は、多くの臨床的な重要な問題の解決を支えるものであると考えられました。精巣機能に関しては、金沢大学の並木教授にお願いし、精子形成にかかわる関連遺伝子についての最近の研究成果と臨床への応用について講演をいただきました。基礎的な研究成果が着実に臨床の場で応用されていることが示されたものと思います。しかし、卵巣機能の理解と比較すると、いまだに遅れをとっている感は否めません。この分野へ若い力が参入することを強く期待したいと思います。

日本医大の佐久間教授と横浜市立大学の平原教授には、「性分化異常の基礎と臨床」と題するシンポジウムを企画・司会していただきました。新井教授、藤枝教授には、性分化機構に関与する遺伝子機能とその異常、あるいは性ホルモンのgender identity確立への影響と、さらに胎児期のホルモン環境との関連など、興味深い最近の研究成果が報告されました。一方、最近臨床的にも注目されている性同一性障害に関して、埼玉医科大学の石原教授が臨床的な側面から多方面にわたる研究結果を報告されました。性同一性障害では、外因性の性ホルモンが生体にどのような影響を与えるのかという生物学上の非常に重要な問題に対する解決の糸口を与える可能性があり、臨床例を十分に観察することが今後も必要ではないかと考えられます。

一般演題でもすぐれた研究成果が報告されており、本学術集会の主催者としてはうれしい限りでした。特に、本学会に占める精巣機能の演題が少なくなっていることを憂慮しておりましたが、今回学術集会では、この点の改善が若干できたのではないかと考えています。精巣機能の研究に携わる会員の先生方の多大なご協力に感謝致します。

最後に、本学術集会をご支援いただいた武谷理事長、理事・評議員の諸先生、会員の諸先生に感謝いたします。